東ティモールで耳にした
ある青年の歌。日本帰国後も
メロディーが耳を離れない
監督は青年を捜すため
島へ戻る　そして
ひとつの旅が始まった

「ねぇ　みんな　ねぇ　大人たち
僕らの過ちを　大地は観ているよ」

歌はこう始まっていた。
インドネシア軍事統治下にひっそりと歌われた歌だった
青年に連れられて　私たちは島の奥へと入っていく
そこに広がるのは　霊たちと共にあるくらし
青い海　たわわに実るマンゴー　はじけるような笑顔の人々

常夏のおおきな太陽に照らされ、深い影を落とすのは、
人々のいのちを奪った軍事侵略。
報道に載らない地下ビジネス、日本が為すべき行動。
三人に一人が命を落としながら、彼らが守り抜いたもの

「悲しい。いつまでも恨みは消えない。
でもそれは怒りじゃない。怒りじゃないんだ。」

「人は空の星々と同じ
消えては　空を巡り　また必ず　君に会える」

大地に生かされ、輪になって踊る、遠く懐かしい風景。
いつしか、ティモールの旅は問いかける。
愛すべきふるさと、日本の島々の姿を――

まだ観たことがない人へ
もう一度、観たい人へ
何度でも観たい人へ

広田奈津子監督・小向サダム音楽監修 来岐阜！

「カンタ！ティモール」上映会のごあんない

Canta! Timor うたえ！ティモール

アレックス追悼上映会

2018年
3月2日（金）
17:00 開場 18:00 上映

上映までの時間、広田奈津子監督と小向サダム音楽監修とおしゃべり！
コーヒータイムを設けました。（東ティモールのコーヒーです）
ご希望の方は参加費 500 円（コーヒー＆お菓子代）

みんなの森メディアコスモス **かんがえるスタジオ**

18:00～「カンタ！ティモール」上映（108 分）
20:00～広田奈津子監督のトーク
20:30～小向サダム・ミニライブ
20:45　終了

チケット 1000 円
東ティモールのコーヒー豆付き
（オーガニックコーヒーです）
★自家焙煎ボンガ珈琲さん提供

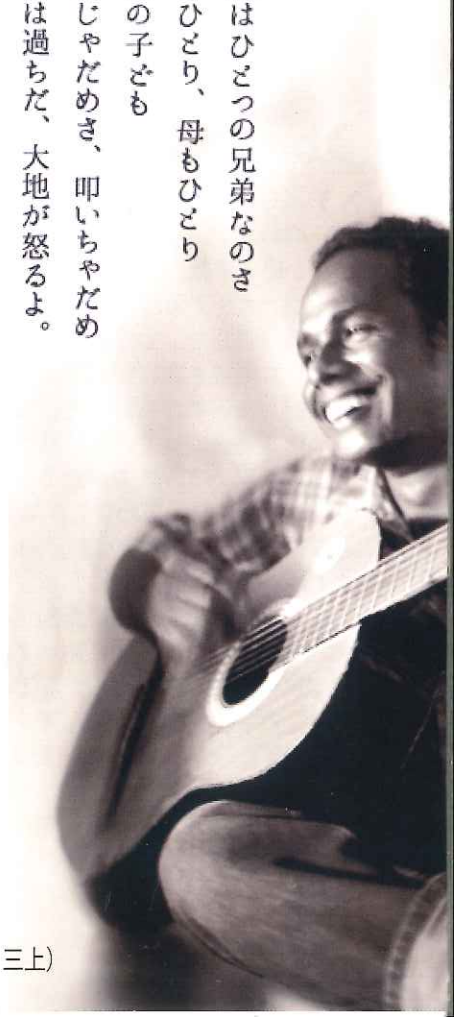
Helder Alexio Lopez（通称アレックス／2017 年 11 月 9 日逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

主催：カンタ！ティモール上映実行委員会
共催：メディコスクラブ

カンタ！ティモール上映実行委員　★桜井 裕子★仙石 友妃子★清水 知恵★各務 亜紀★田辺 桜子★布施院 博之★河口るりこ★九野 秀典★とまり木★泉京垂井★三上 みき

問い合わせ：058-383-8666 or 090-7854-4561（実行委員・三上）

人類はひとつの兄弟なのさ
父もひとり、母もひとり
大地の子ども
憎んじゃだめさ、叩いちゃだめ
戦争は過ちだ、大地が怒るよ。



ティモールの人々の暮らし

ティモール人の 9 割が農民です。厳しい自然の中で暮らしのほとんどすべてを自分たちの手で営んでいます。

お百姓さんを見ていると、暮らしは芸術ですよね。たとえば牛追い歌。いい歌い手だと牛がよく働くので、村では重宝される。歌が下手だと牛は勝手に畔に上ちゃって休憩しちゃう･･･(笑) 子どもも 12 歳くらいで歌の修行をしていました。そして収穫になると村人が籾を足で踏んで脱穀をします。そのステップがかっこいいんです。昼間ぐて～っとしてたおじさんも、お祭りになるとかっこいい。

それは労働とは全然違う次元のことで、経済に換算できない人間のあり方そのものだと思う。それと、男の子を育てて思うのは、戦いたい欲求があるんだなぁ、って。山の暮らしの中では、祭りの準備で牛や豚を殺して捌いたり、狩りに出かけたりします。どちらが死ぬか分からないっていうくらい強い相手とやりやって､その命をいただく。それが村を支える。男の子は特に、そうした、命と深く関わるという行為を欲しているのではないかと。「戦いはだめ」と単純に思っていた私は、それでは片づけられない人間らしさや、生き死にに立ち会う意味、戦いの作法を知る必要があるのだということを理解しました。

星ふる島　ティモール

初めてティモールへ行った時、ある歌を聴きました。それはこう始まっていました。「ねぇ、仲間たち　ねぇ大人たち　僕らのあやまちを　大地は知っているよ」。私は「僕らのあやまち」って何のことだろうと思いました。巨大な軍に攻撃される小さなティモールの人が「ぼくらの」と言うのです。その意味を知りたくて、歌っていた青年を探しに出かけました。彼にその意味を尋ねると、「歌は哲学だから、そんなこと聞かないで」って。「そんなことよりも島を見せてあげるよ」と言って、いろいろ連れて行ってもらった。島の暮らしを垣間見る中で、「ぼくらの」と歌われた意味が少しわかりました。ティモールの人々は、体の外側は体の内側だと言います。自分と相手が分けられない、命がひとつらなりにある世界観です。その精神的な土台の上で、独立運動があったのでした。

その歌は爆撃のさなかにひっそりと歌われたものでした。歌には日本語の詩がついて「星降る島」として歌われ、今ではハワイアンフラもつきました。

みえないものの力

インドネシア軍は侵攻当時、ティモール陥落は「一日で足りる」と言っていました。人権団体でさえ、東ティモールの独立は叶えば奇跡と囁いていたそうです。それが最後には軍が諦めて撤退した。それは大きな力ではなく、小さな一人ひとりの想いが働いたのだと思います。ティモールを旅して、私は人一人に秘められた力が何より強いのだと信じられるようになりました。

映画制作は全くの素人仕事で始まりました。険しい山道を行く時や取材の中で、不思議な力に助けられることが多々ありました。そのおかげで出来あがった映画だと思います。きっと「どうか次の世代が平和であるように」って、強く願って亡くなった人の想いが、私たちの仕事を助けてくれたのだと思います。その想い、意識というか、それがすごく大事なのではないかと思うようになりました。

ある村で長老が「死ぬことよりも魂が迷子になることの方が、よほど厄介なんだ」といいました。それは自分の身体が死んで終わり、ではないということ。魂が迷子になるというのは例えば、インドネシア軍から武器やお金を受け取って、本来の生き方ではない選択をすること。ティモールでは、極限状態でも NO と言い続けた人たちが圧倒的に多かった。すごいことだと思います。

振り返って、現代社会はみんなで迷子になっている気がします。経済発展を追い求めて、ゆたかになったつもりが、みんなで迷ってしまってる。どうしていいかわからなくなって、たくさんの子どもたちが自殺して･･･社会が病んでいると感じます。「魂が迷子になっちゃいけない」という言葉を、日本にいてよく思い出します。

笑顔があふれている街

ティモールでは見知らぬ人とすれ違っても目を合わせて笑顔を向けます。山村でも、村長にユーモアがあると村の雰囲気がいいですね。

インドネシア軍が 1999 年に破壊の限りを尽くし、民家の 9 割が焼けました。わたしが現地に入ったのが 2002 年。焼け出された難民も家に帰れてない状況でした。インドネシア軍に加担した日本から行くということを、現地の人たちはどう思うのだろう、って、飛行機から島が見えた瞬間に膝が震えちゃったんです。でも、会う人の笑顔に救われ、逆に悲惨な状況の話しを聞いてわたしが落ち込んでいると､肩をぱーんっとたたかれて､「そんな顔しちゃダメよ」､「笑ってなきゃダメよ」､って言われました。

ポリネシアの方で聞いた創世神話で、神さまが天を創って大地を創って、生き物を創っていって、最後におおきな木の根本に人間を座らせました。で、人間をつくる仕上げに神さまは、お腹をくすぐったんですって。すると人間があははって笑って､人間が完成しましたっていう神話。笑ってこそ人間。それをティモールで思い出した。こんなにいっぱいトラウマを抱えた人たちが、笑顔を忘れていない。笑えなくなったら人間じゃなくなっちゃう。傷を癒していく智恵なのかもしれません。逆に怒りや憎しみというものが、自分の身体を痛めてしまうということを、治療の現場でも言われるんですね。

治療師が患者にずっと寄り添って、めい想とか内観をしていきながら、その人の気づいてない過去の出来事や、精神的な後遺症で、記憶が消えてたりする部分を引き上げていき、怒りを流し出すことをしてはじめて、身体が回復をしていく。そういうのを間近で聞かせていただくと、人間って自分一人で復讐したり、それで気が晴れるっていう単純なものではなく、全いのちが関わり合っていて、良いことも悪いこともみんなの上に起きている、そういうことなんだと納得しました。

平和特集ー1　映画「カンタ！ティモール」から平和を考える
監督：広田奈津子さんに聞く　より
ぎふ発・子育て生活情報紙「にらめっこ」181 号一部抜粋
全文は http://www.niarmekko.com で読むことができます。